

Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.102

試 行 錯 誤



マザースクールで発表する女性たち(エチオピア)

特集 第三世界の女性に学ぶ

元気な女たちが語る 第三世界の女たち	3
エチオピアのおっ母ちゃんたち	8
empower 売春婦の味方のNGO	10
オバサンは素晴らしい	12
“今”を生きる女たち	13
自分を追いこむからパワーがでるのよ	14
My Dear Friend	16

第三世界の女性に学ぶ

皆さんがすでに感じていらっしゃるように、第三世界では日々の生活や労働の中で女性たちのしめる割合が大変多いのです。にもかかわらず、その割には地位が低く、女性たちの視点が社会に反映されることが少ないようです。しかし、政治に象徴されるような抽象的な世界に生きている男性以上に、より具体的な状況に直面している女性たちは社会の矛盾や環境の問題に敏感です。そして、そうした矛盾や問題に対して、やむにやまれぬ反応をしめすのも女性ではないでしょうか。こうした抑圧をはねかえす第三世界の女性たちの動き、反応、生き方、逞しさ、したたかさ、そして元気になった女性たちを今回のテーマにしたいと思います。

例えば、アフリカでは全農業労働の80%が女性によって担われているともいわれます。水汲み、燃料集めなどの重労働も女性の仕事です。干ばつになって近くの水場が涸れると、より遠くまで水を汲みにゆかねばならなかったり、また森林伐採によって家の近くで薪が採れなくなったときは何キロも歩いて燃料を手に入れなければならないのも女性です。ところが、こうした女性たちこそが、村での水の確保、保健衛生、あるいは植林の牽引力となっています。JVCのマーシャ村でも今まで男性に押さえつけられてきた女性たちによる活動が盛り上がり、ケニアでも女性のグループの活躍がみられます。インドのチプロ運動では、女性たちが木に抱きついて伐採を防ぎました。

この地球の上で環境をこれ以上破壊せずに、これ以上戦争や虐殺をおこさないで、様々な地域に住む、異なった習慣を持つ人々が共存してゆくための生き方、ライフスタイルが真に求められる時代です。そのための具体的な生き方、生活の仕方を教えてくれるのは、実はアジア、アフリカの女性たちではないでしょうか。

(林)



石をこすり合わせて粉をひく(ソマリア)

元気な女たちが語る 第三世界の女たち

金子友子 杉本 皓子
中善寺礼子 松井やより 司会 林 達雄

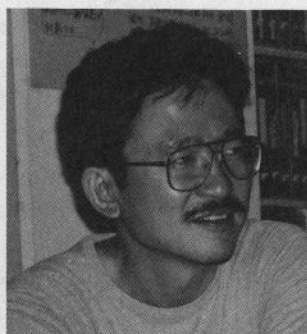
第三世界との出会い

林：女性の立場については、僕なんか第三世界に関わるようになってから、特にエチオピアに行ってから、考えるようになったと思います。エチオピアの飢饉のさなかに医療活動をしばらくやっていたのですが、その後もっと生活全般から、飢えの問題というのを何とかできないかと、もう少し村に残って、その村人の生活などにかかわるプログラムに変更したわけです。

医者としてこの地域に入った頃、最初、僕もだらしがないのですが、看護婦さんに食事を作ってもらっていたんです。同じように忙しい中で、そういうことまでやってもらっていると、だんだん看護婦さんも疲れて、そんなところからもあつれきが生じるようになりました。そういう中で、食事当番なんかも交代でやろうっていう話になってくるんですね。私も最初できなかったですけど、やってるうちに少しずつできるようになってきました。食べ物のことに関しても自分で多少なりとも作ってたべようって所から出発してくる。この村の市場にどんな食べ物があって、それをどう食べようか、要するにそこにある食べ物などに関しても非常に敏感になってきます。その辺がどうも大事なところじゃないかというのを感じ始めました。

エチオピアはキリスト教とイスラム教があるんですけど、結局、女性の置かれている立場というのは非常に悪いんです。どういうふうに悪いかというと内縁関係みたいな結婚形態が非常に強いので、男の一存でバイバイされた母子家庭が多い。女性にとってみればたまったもんじゃないが、よそを知らないからこれを当たり前だと思って生きる、そういう感じなわけです。

それだけの状況にありながら、逆に復興のプロジ



林 達雄
JVC事務局長
医師
83年にJVCに参加。
タイ、エチオピア
の現場を経て現在
に至る。

ェクトでは、女性たちの方が主導権をとり頑張っています。最初はJVCのスタッフがひっぱっていくんですが、その後その女性たちの中で興味をもった人たちが、自分たちで他の人たちに伝え、人前でほとんどしゃべったことのないような人たちが、村の他の女性たちに対してもしゃべるようになっていきました。お互いの間で、しゃべる訓練をしたりとかするんですけど、やってみるとそれなりに自信を持てきます。男たちに対しても同じアプローチをしているのに、どうして女性たちの方がやる気を出してくるかということに対して、最初は非常に不思議だと思っていました。だけどよく考えてみれば、これは不思議な事じゃないんじゃないかと思いたしたんです。干ばつがくれば、より遠くの水場に水を汲みに行かなくてはいけないし、汲みにいくのは女性たち自身だしね。燃料がなくなって、最初に煮炊きで困るのは女性たちだということで、よくよく考えてみれば一番日常生活の節々に触れている人が一番敏感なんじゃないかっていうことに気づくわけです。

第三世界の例を出しましたが、それに必ずしもこだわる必要はないと思うので、自分の生き方も含めて、自己紹介をお願いします。

杉本：名古屋からきました杉本といいます。10年前、当時は、まだ市民運動という言葉も知られていなか

中善寺礼子

90年7月より熱帯
林行動ネットワー
クのスタッフ。7
月末に結成された
サラワク・キャン
ペーン委員会のス
タッフも兼任。



ったんですが、フィリピンのバナナプランテーションの労働者について話を聞きにいった、そこにいた人たちがグループを作ったのがきっかけで、市民運動を始めるようになったんです。それで3年後、83年にフィリピン情報センターをつくって、今に続いているんです。

金子：私とアジアの関わり方を遡ると、20年以上前になります。当時は福岡の九州朝日放送のアナウンサーをやってたんですけど、休暇をもらって3週間かけてインドに行ったんですね。なぜインドに行ったかっていうと、朝日新聞に載ったインドの飢餓の写真を見て、それでビビビッてきて、インドに行きたい、行きたいとなったんですね。その時たまたまインドとの国際交流みたいなのをやってる人がいて、その人のついでにインドのマハトマ・ガンジーの重臣をやっていたというおばあちゃんに会いに行ったんです。インドの首都からちょうど20kmぐらい北に上った村なんですけど。

おばあちゃんの名前は忘れたんですけど、尊称でジジと呼ばれてたんです。向こうでは、おばあさんを尊称でジジと呼ぶんです。

ガンジーの遺言で、「あんたは地域向上のために学校をつくりなさい」と言われて作ってるのですよ。で、その学校の教師の所に預けられたんです。その教師は22歳で、私はもっと歳が上だったんですけど、彼女は威厳があるんですよ。彼女をすごいなあって思いました。帰国してからも彼女と文通してたんですけど、彼女を日本に呼ぼうということになって、こちらに来たら私が全部面倒みようとして張り切っていたんです。そして、到着するという日に羽田に行ったんですけど彼女が来ないんですよ。

そしたら後から手紙が来てね。出発の日に、マハトマ・ガンジーの重臣だったおばあちゃんに「外貨が減るから行くな」と言われたっていうんですね。結局来なかったんですけど、私は会社辞めて2カ月ぐらい国内見せてあげようと思ってたのに。

それからフリーになって中性洗剤の事を勉強していたのですが、その時に有機農業に出会ったんです。

私、化学を高校の時転校して取り損なったので、有機とか無機とかものすごく弱いんです。H²Oがわかんなかったくらいだから、この有機ってのは何だろう、全然わかんないんですよ。それで講演会があるというので聞きに行ったんです。そこでなるほど有機農業かってんで、有機農業、有機農業となつて有機農業の研究会に入ったんですね。そしたら金子さんと言う人が前から有機農業をやつてて、なんだかんだと言ってる内に一緒になっちゃったんです。

有機農業を知ってからフリーの仕事を辞めて、ヨーロッパの有機農業めぐりをしようと、物見遊山も兼ねて一年位まわったんですよ。戻ってきてすぐ結婚して急きょ農家のかみさんになって、あっちこっちに有機農業を通じた友だちがいるから、じゃんじゃん呼んじゃおうかっていうんで呼んでたんです。アジア学院からも、6年前から毎年8月になると研修生を送ってくるんですね。それが縁で15年ぶりにインドの女性たちに出会い、感慨深いものがありました。その他の国からも来ましたけど、アジア学院からの研修生が一番印象深いですね。これはまた後で話します。

中善寺：私は今、熱帯林行動ネットワークをやっているんですけど、最初はアジアの女たちの会に入つて、それがきっかけでこういう世界にどっぷりつかつてしまったという感じなんです。それまで大学で国際関係のゼミで南北問題を勉強したし、ユーゴスラビアの労働者の自主管理や非同盟外交とかやったんです。卒業してからもジャーナリストになりたいと思っていたので、新聞社の試験を受けていたんですけど、その予備校みたいな所にアジアの女たちの会のメンバーがいたんです。それで合宿に参加することになったんです。そしたらそこは、これをやりなさいとかいうものがない会だというのがわかって、例えば私は出稼ぎ女性の問題をやりたいとか、物を通してアジアを日本とのつながりをみたいとか、いろんなグループができそうだったので、物を通してアジアと日本とのかかわりをさぐるというチームに入つたんですね。そこでスリランカの紅茶の問題をやつて、しばらくはスリランカ、スリランカとうなされるようにやっていました。

それでその会のなかに松井やよりさんがいて、ボルネオの報告を朝日新聞に連載したんですが、連載する前に私たちに報告してくれるんですね。その中

で、写真を見ながら、「森を守ろうという運動をこ
ういう若い人たちが一生懸命やってるよ」といって。
みんなステキでしょ。いい男でしょとか言うんです
けど、まさか自分が後になってそういう人と結婚す
るとは思っていませんでした。それがサラワクとのか
かわりの始まりでした。

松井：私の家庭がキリスト教徒だったので、どちら
かという西洋的な教育を受けて人権や平等など学
んだのね。それで日本はそういうのがないでしょ。
日本が嫌いだったから、とにかく他の国へいけばい
いという感じ。国境という概念は若い時からあまり
なかったから、アメリカやフランスに行ったんです
けど、そこで人種差別を受けたわけですよ。非常に
深い屈辱感を受けまして、西洋だってひどいものだ
なあっていう気持ちを持ちました。そして日本に船
に乗って帰ってくる時に、初めてアジアと具体的に
触れ合ったんですよ。旅人としてだったけど。

そこで見たのは悲惨なアジアですよ。死んでいく
アジアですよ。ものすごいアジア、うめいているア
ジアっていうことしか見えなかったんですね。その
後新聞記者になってアジアとの関係が全然なかった
んですけど、74年に若い人たちのスタディツアーに
参加させていただいて十何年ぶりにアジアを訪れま
した。ベトナム戦争のさなかの南ベトナム、それか
らタイ、マレーシア、インドネシアっていうふう
に3週間ぐらい回ったんですけど。

最初にアジアに行ったのは、1950年代の終わりで
すから、日本は敗戦国でとても貧乏な国だったわけ
です。その頃、アメリカなり、ヨーロッパっていう
のはとにかく豊かで、その豊かさに圧倒されたん
ですが、それとまた対照的に貧しいアジアに私はもの
すごい憤りを感じちゃってね。こりゃ何だと！ ヨ
ーロッパの中で感じた人種差別と、アジアにっぱ
いある植民地支配というものに関する深い怒りが私
の中にずっとたまってたんですよ。それで次に70年
代にアジアに来てみたら、今度はあれだけ憎んでい
たヨーロッパと同じ役割を日本がしているという
事で、もう2度びっくりしてね。自分の国がやって
ることだからね。前はヨーロッパけしからんと他人事
のようにしていたのが、自分の国の侵略的な状況に
怒りを感じたんですね。

たたかう女たち

松井：もうひとつアジアの旅で感じたのは、アジア
の女の人たちのたくましさです。日本に帰り「東



松井やより
朝日新聞編集委員。
アジアの女たちの
会会員。
アジア、女性問題
に関する著書多数。
『魂にふれるアジ
ア』『女たちのア
ジア』『市民と援
助』など。

南アジアの女たち」という連載を始めたのね。その
連載した時の内容は覚えてないんだけど。今でもよ
く覚えているのはタイの女性が、実に堂々と生きて
るっていうのに圧倒されたのね。日本のその当時の
女性も、主体的な生き方をしていなかったのね。

ベトナムの女の人たちはあの戦争の中、牢屋に入
って死ぬ寸前までハンストして抵抗してるのね。あ
のマダム・ゴガダンって人にも会ったんだけど、ほ
とんど痩せ衰えて出てきた。そういう人の強さとい
うか、最初の船の中で見た悲惨なアジア、貧しいア
ジアっていうのとはまた違う面に出会いました。

でもアジアを回って日本に帰ってきても誰もそん
なことに関心をもてないのね。そしたら、1974年
にウルグアイでアジア人会議というのがあって、キ
ーセン観光反対っていうのをやってたんですね。こ
のキーセン観光反対の運動は、73年にソウルの女子
学生がキンポ空港に行き、私たちの祖国を日本の
男性の遊廓にするなどデモをやったっていう小さな
記事に非常にショックを受けて、一体何が起った
んだと参加してみたら、日本の男性が女性を買いに
くるってことを、初めて知ったわけですね。それでキ
ーセン観光反対運動っていう形でアジアに関わった
んですね。

林：杉本さんは、10年前にフィリピンバナナとい
う関係で市民運動に入られたと言っていました。そ
の前は何をしてらしたんですか。

杉本：以前は保育園で働いてたんですね。すごく
仕事人間だったんです。家庭と仕事をやってたら社
会参加しようという気にはならないんですね。関心
だけはあったんですけど。

それが退職したら、今度はずっとできなかった共
同購入などもできるようになって、日本消費者連盟
の会員にもなったんですね。日本消費者連盟の方か
ら名古屋でもバナナ集会をやるからおいでという
ハガキをもらって参加したんです。それが初めてで、
その時には一人目の息子の子育てがほぼ終わってま

した。その集会でフィリピンの子どもたちやバングラデシュの子どもたちの8割が栄養失調だとか、水の問題、食事の問題のひどさや、親たちは過酷な条件で働いてるし、というのを見て何だこれは！ と思ったわけです。自分の立場とえらい違う世界があって、その世界に対してフィリピンの人がバナナのことを例に取って、これをあなたたちはどう考えますか、ということを語りにきたんだということが、集会を終えたあとの質問のやりとりでわかったんですね。だけど、じゃあ私はどう考えたらいいのか、ってわからなくなってるね。それが始まりだったけど、すごく大事な問題だということだけはわかった。3年くらいやってるうちに、自分たちも直接行ってみようというふうになったんですね。自然と流れ流れて自由に辿り着いたというか、そんな感じですね。

林：人と出会うことによって自分の位置もわかるということですね。

杉本：ええ、その後もっと日本の中で参加できる部分を探していた時に原発問題の人たちに会ったんです。各地の女の人たちは、これまで食べ物の学習会や添加物の問題を70年代にやってきたんですね。80年代は農薬の問題について結構勉強したのね。私は子どもがアトピーになったことから、添加物や農薬の学習をしていて、ほぼ終了したところにバナナに出会ったんですね。

フィリピンでバナナ労働者たちが、どうやって労働者を組織するかというと、労働者が困っている問題を組合の人たちが、それをピックアップする形で課題を作り上げていこうとするんですね。その際に一人一人にあたって、つきあいを大事にしながら相手の家庭の状況をみていき、みんなで支えあいながら運動を組み立てるんです。そういうことは、原発の事でも三重なり、石川の漁民の人たち自身もやってたんですね。Uターンした人たちも、地縁、血縁から解放される形で原発反対って言えないところを、一軒一軒回ってるんですね。それが名古屋ではできなかったんですけど、地域の焦点になってるところなんですね。今年2月の選挙告示前に、選挙と関係ないところで原発についてどう思うか、聞いて行く中でどんどん自分も変わるし、まわりも変わってくるんです。最初は地域のお母さんたちは選挙なんかやってると目立つからね、ご飯の差入れとかをやったの。それが子どもを連れてピラを配り出すとか、自分の言葉で隣の人に訴えることを始めるのね。そういう人の変化を1カ月もたたないうちに見てしま

った。私には新鮮な喜びだった。

原発だけでなく、自分たちで本当に困っている問題に共通なものとして、社会のテーマにしていく過程っていうのが、私たちにもできるんだっていうのがわかってきた。

松井：フィリピンのバナナの話で思いだしたけど、ヨーロッパにいとインドとフィリピンの女性が運動の仕方や表現の仕方、組織力のどれをとっても一番活発なんですね。英語ができるということも関係してるだろうけど。

フィリピンは治安が悪いとか経済が悪いとか、悪いイメージばかりだけど、私はすごいと思うのね。



杉本 皓子
フィリピン情報センター運営委員。
消費者運動を通じてフィリピンに出会い、フィリピン問題にかかわる。

今年の3月にも3～4日だったけど、スラムに行くはめになって、まあそのくらいスラムが多いんだけど。マニラの北の方のスラムに行ったらね、広いスラムでフィエスタなんかやっててね。朝まで歌って踊って眠れないわけですよ。それが終わったなあと思ったら太鼓の音がワワワと鳴ってね。子どものグループが何かやりだす。各戸を回るのね。スラムに住んで生活状況は良くないんだけど、そこで楽しむ術を知ってるのね。

インドの場合、インドの国中にいろんな女性の運動があって、農村からスラムまであらゆるところに活動があります。去年、アジア女性フォーラムに呼んだカムラバン・シンさんは、向こうでは字を読める人が少ないから、歌や太鼓で表現して伝えてるんですよ。豊かな表現力、どんな田舎にいても女の人たちがちょっとしたドラマをつくる。

チプコの運動の例があるけど、この運動を始めたレニ村はヒマラヤの4000mの所にあるんですね。

運動を始めたゴウラ・デビさんとの出会いは自分の人生を変えるくらい衝撃だった。彼女が住んでいる場所というのは、とにかく文明の利器がない。だからお茶をいれるのにも、マキをかっついてきて、火をくべて必死になって汲んできた水を使って沸かすわけね。

どうぞすわんなさいっていったってね、目の前のカーペットだって、外で飼ってる羊の毛を使って自分で編んだのよね。あらゆることを自分の手でやってる。そういう意味ではある種の芸術ですよ。向こうは物質的には恵まれていないけど、彼女がいったん口を開くとその威厳っていうのかな、圧倒される。「森っていうのは、私たちにとって命なんだから、命を守るのは当然でしょう、自分の子どもがもしトラに襲われたら、その子どもを抱きかかえて守るのと同じ」っていうの。そして「日本で何か運動をやるんだったら加勢しますよ」っていうのね。びっくりしちゃうわね。彼女の表現力、威厳、卑屈なところがひとつもないのね。木に抱きついて、木を守ったときも背中を切るなら切ってみろってね。

男たちも生活に参加を

金子：私の家ではいろんな研修生を受け入れているんですね。フィリピンからきたジジっていうかわいい女の子がいたんです。朝6時にみんなで起きるんですけど、朝食の20分くらい前には一緒にいて「何か手伝うことはありませんか」ってパッパッって手伝ってくれるわけ。うちはお父さんのお茶わん、お母さんのお茶わん、お客様のお茶わんと、少しだけ決まってるんです。それを見て覚えてるのね。

後片付けも仕方なく女の子が洗っているけど、私が実習生の男たちに「あなたたちもね。お父さん、お母さんがいなかったら、自分でご飯を食べなくちゃいけないし、皿も洗わなくちゃいけないし、自分の分だけでもお茶わんくらい洗いなさいよ」っていうと、女の子たちの洗う分が減って、今度は女の子たちが手抜きし始めた。それまで黙って男の分も洗っていたのに。ところがフィリピンのジジはね、何にも言わないのに、元気にやっちゃう。

材料は揃ってなくとも、「あっ、これでフィリピン料理ができる」といって作ってみせる。とにかく全ての時間をフルに「私は男です、女です、奉仕します」そういう意識を越えてるのね。日本人の場合は、今は奉仕の時間です、とか枠があるのね。男性に家事をやらせるためにわざと女性がやらないとかそういう計算をしないのね。

杉本：日本の学生を5人くらいスタディツアーでフィリピンに連れて行ったのね。近くの人が食事をしませんかって招待してくれたの。

日本の場合は自分たちの分はとっておいてお客さんには別に出すけど、フィリピンではあるたけの物



金子友子
九州朝日放送のアナウンサーを経て
中性洗剤の反対運動にかかわり、現在
は埼玉県で有機農業を行う。

を出すから学生がたらふく食べたら、家族の分がなくなってしまうのね。それを教えてあげたら、その子は悪いことしちゃったなあって、すぐ反省してた。「自分の価値で判断していると、相手がそういうからといって言葉だけで判断してはいけない、相手の生活の方法にも対応しないといけないね」というふうに新鮮に受けとめてくれた。そこから話が盛り上がり、相手の心との出会いについても話が出てくる。こういうことをきくと来年もまたスタディツアーをやろうって思うね。暮らしぶりから、まわりの関係をよくみられる。

中善寺：私、サラワクに行くまでは絶対に子供はいらないって思ってたんです。ところがサラワクに行ったら、男の人が子供を嫌がらない、自然にかわいがってあやしているのね、隣の娘もこちらの娘も同じように。それを見たとき「あっ、この社会だったら産んでも大丈夫」って思ったんです。

インドネシアの村に行ったときも、村の人が私たちを見にきたんだけど、男の人が赤ん坊をずらずらーっておぶっているの。うわーって思った。普段の生活を自然に分かちあうというのがすばらしい。日本では分かちあえなくて、変な奴といわれてしまう。

林：たしかにアジアじゃ男の人でも子供を大事にしてるっていうか、あれはいいよね。JVCにも赤ん坊がいるけど、俺なんかもだんだん子供を抱くのになれてくるし、そうすると気晴らしにもなって、おもしろいね。

一同：楽しませてもらってるね。息抜きになる。ほっとする。

松井：そういうことをする余裕がないのね。今の日本の男たちの働きかたには、問題があるよ。

林：結局、男性である俺たち自身がどう変わるかっていう課題を突きつけられたような格好になったけど、女たちにももっと頑張ってもらいたい、それで俺たちも元気がでると思う。

エチオピアのおっ母ちゃんたち

江原 広美

おっ母ちゃんの仕事

田舎の女性、母親たちを見ていると、そのあっけらかんとしたおおらかさに、ほっとさせられる。朝早くからの粉ひき、水汲み、何時間もかけての燃料ひろい、食事の用意、子どもの世話からお酒のしこみと、文句も言わずに「これが女の仕事です」と全く平然と受けとめている。彼女たちの中に、ことさらそれらの与えられた仕事不公平という意識はなく、悲壮感がないからであろうか。

私たちは、彼女たちを「おっ母ちゃん」と呼ぶ。きどらないたくましさ、やさしさ、おおらかさになんとなくぴたりくる呼び名だと思っている。

新しく活動を始めた東ゴジャム州イエドハ村で、ある若いおっ母ちゃんから話を聞いた。

「夫は戦争に行ったきり、死んでいるのか生きているのかわからない。土地はあるけど、歩いて3時間かかるし、私は牛を持ってなくて耕せない。人に頼んで耕してもらっているの、収穫の半分はその人に払っている。子どもは2人。3歳と1歳。現金収入はアラキ(焼酎)を作って月10ブル(700円)。税金は戦争のための特別税が年に45ブルと、一般税が25ブル。払えないと村を追出されてしまう」

まゆをひそめながら聞く私に、むしろ淡々と話してくれる。

「楽しいことは、近所のおばさんたちとコーヒーを飲んでおしゃべりすること。今ほしいものは、お金」と、極めて現実的である。「私の作ったアラキを飲んでみて。コーヒー入れようか? コロ(煎り麦)食べて」

忍耐なんて言葉がしらじらしく思える。彼女はすべてを受け入れた上で、あくまでもやさしく、どしりと力強く、そして少し孤独な感じがした。

マザースクール

1989年、保健衛生教育(マザースクール)を始めて3年目のマーシャ村。新参者の私が出会ったのは、元気でものおじしない若いおっ母ちゃんたちだった。

総勢27人(うち、男性5人)である。

平均年齢24~25歳。全員子持ち。2人を除いてあとは独身。マザースクールに参加(受講)した人々の中から、アクティブでJVCの活動することを許す家庭の人たちが選ばれた。学歴はいろいろ。学校に行ったことがない人もいれば、10年生までという人もいる。

彼女たちは、午前中は3~4人のグループに分かれて、家庭訪問に出かける。説明に使う絵や調理実習のための材料をかかえて村の外へと散って行く。はじめのうちは村の近くだったそうだが、活動地域はどんどん外へと広がって、今や片道1~1時間半。目的とする村まで歩き、人々を集めて講習会をする。村人を前にして堂々とした講師ぶりである。

「家庭菜園のための簡単な堆肥の作り方は、まず30cmほどの深さの穴を掘って……」

村人たちのささやき声「30センチ、何?」

「30cm???」

「30センチというのは、これくらい」(と手を出して指先からひじまでを示す)村人はなんとなく納得し、説明と実演が続けられる。

午後はJVCコンパウンド内の畑で、野菜作りや次の日の準備。3時ごろからは自習の時間になる。

ある午後、マザースクールのをのぞいてみると、折しも自習の真っ最中。新しく家庭訪問のスタッフに加わったおっ母ちゃんが、講習の練習をしている。聞いているのは、先輩スタッフ。一生懸命に暗記した文章を、上目づかいにスラスラと読んでいたのだが、「もうちょっと絵を上げないと、みんなに見えないよ」と言われたとたん絶句してしまった。うつむいたきり顔も上げられなくなってしまった彼女に「アイゾシ(がんばれ)」と口々に声をかける先輩たち。「もう一度やってみたら?」誰からともなく言い出して、初めからやり直すことになった。彼女はもうしばらくは先輩についてアシスタントを続けることだろう。

「教材に使っている絵が古くなってしまったし、

チームも増えたから、もっと必要なんだけど。私が描いてみたいの」

まわりの仲間から「ほんとにできるのー？」なんてからかわれても「やらせて！」と、やる気満々。初めのうちは、仲間から「なに？これ、犬？」「牛よ、牛！！」「これじゃ、みんなにわからない。使えないから描きなおして」と、さんざんである。

言にくいことをはっきり言われて、ションボリしていることも多かったが、2カ月もすると、仕事も早くなり、こんどは仲間から「あれも描いて、これも描いて」と注文が殺到。「アシスタントが必要だ」と悲鳴を上げる1コマもあった。

また、JVCで働くようになってから、小学校に入りなおしたおっ母ちゃんもいる。「今ね、息子が2年生で、私は4年生。子供の時は行かせてもらえなかったから。校長先生に頼んで特別に入れてもらったの。高校まで行けるかどうか分からないけど」

はにかむ中に、静かな闘志が感じられた。

「雨水はきれいだ」

雨期の真っ最中、農繁期のため家庭訪問等、通常の活動が難しくなる時期に、おっ母ちゃんたちの再教育プログラムが組まれた。保健省所属の看護婦、衛生士等に講義をお願いした。講師が「雨は空気中の多くの有毒物質によって汚染されているため、これを利用するのは危険である」という話をした時、おっ母ちゃんたちから異論が出された。

「JVCでは、雨水をどうやって生活水として利用すべきかを考えてきた。工場や車の多い町が近いならともかく、こんなマーシャのどこに汚染があるのか。雨水はきれいだ」と主張し、議論になった。結局、講師が「教科書にはそう書いてあったのだけど、考えてみれば君たちの方が正しいのかもしれない」と降参してしまった。

地球規模で影響を与える酸性雨や放射能汚染の可能性を考えれば、はたしておっ母ちゃんたちの主張が正しかったかどうかは疑問の余地があるが、まともに小学校を卒業したもののさえまれなおっ母ちゃんたちが、高等教育を受けた講師と、堂々とわたり合ったという事実は大きい。講義を理解しようと努め、自分たちの活動や生活に照らし合わせ、考えてみるという、積極的な意識と真剣な態度がなくては、このような状況は生まれてこないであろう。講師からもエクセレント(優)の評価が与えられた。

今までいっしょに水汲みをし、コーヒーを飲み、

おしゃべりをしていたひとりが、急に先生のようになって自分たちの前に現れても、この先生には権威がない。「小学校もでていないのに、先生のまねごとなんかして」と、村人の反応は決して温かいものではない。皆にわかってもらうために、ちゃんと聞いてもらえるように、失敗のないように、もっと勉強して、もっと練習して……。それは、自分たち自身のための努力であり、村人との相互作用の中で、彼女たちは育てられていったと思う。

選ばれたという自信。食糧によるものではあるが、とにかく安定した収入。人に教え、伝えていくという行為に伴うちょっとした優越感と責任感。そしてたぶん何よりも仲間がいるという安心感が、彼女たちの行動や発言の背景にあったと思う。

最初に紹介したイエドハの若いおっ母ちゃんは、JVCで活動する以前のマーシャのおっ母ちゃんたちの姿でもあった。すべてを受け入れ、淡々と自分の世界の中だけで生きてゆくだけでは、変化は起こらない。積極的に働きかけていく中で、彼女たち自身の内面も周囲も変化してくるということ、そしてその背景には、仲間や自信や安定した生活が必要なことを、マーシャのおっ母ちゃんたちは見せてくれた。

今年のマーシャ村

現在、内戦のためにマーシャ村でのJVCの活動は停止している。食糧配給が途絶えて9カ月が過ぎた。

「今年は、マーシャのマーケットにニンジンが出まわっている。農民たちの代表がデセ(マーシャから歩いて2日のところにある州都。デセはいまだ政府軍下であり、マーシャは解放戦線下にあるため、地元住民と言っても移動には危険がある)に行行って種を買ってきた」。マーシャから今年の5月になって逃げ出して来た、元JVCのアシスタントスタッフが伝えてくれた。

昨年までは、いろいろな野菜の種が、JVCの農業教室やマザースクールを通じて配給されていたが、農民たちが自分で買い求めるということではなかった。トマト、ニンジン、ジャガイモ、キャベツ、ビートルート、農民にとっては目あたらしい野菜の中で、受け入れられたのがニンジンだった。

マーシャ村のおっ母ちゃんたちの内面に、どんなニンジンが残っているだろうか？そして、新しく活動を始めた東ゴジャム州、ピチェナ。マーシャ村といっしょに、ここピチェナでも女たちの生活と力を見つめて行きたい、と思う。

池島千津子

売春婦たちのNGO

タイの有名な歓楽街パッポンで働く女性たちを主な対象に活動しているのがempowerだ。事務所はパッポンのすぐ近くにある。女性が多く、きれいに整理されたオフィスからは、シャカリキになって女性の権利を主張するという雰囲気はちっとも感じられない。とても自然体でエレガントでさえある。壁にはヨーロッパの女性団体のポスターや前衛的な彫刻の写真が貼られ、センスもなかなかよい。

現在パッポンで働く女性は約2000人。タイ全土で約80万が売春をしているだろうといわれている。多くは貧しさゆえに母から娘へ伝統的に売春が伝わるといわれる北タイや、貧しい農村部から出てきた少女たちが夜の歓楽街を飾る。売春がいいのか、悪いのか、それはやってる本人たちのモラルによるし、個人的行為だと思うから批判するつもりはない。しかし海外からやってくる観光客めあてに成長しているセックス産業から職を得るために、貧しい農村部からでてくる少女たちのことを考えれば、ましてやエイズの危険性が異常に高い職業だということを知れば、彼女たちの側にたって活動しているempowerの活動は重要だしすごいと思う。

empowerの活動

empowerができたのは1985年。現在もこの団体の代表をされているチャントウィパ・アピスク(CHANTAWIPA APISUK)さんが友人たちとパッポンを訪れ、そこで働く女性たちと知りあったのがこの運動をはじめのきっかけだったという。最初に始めたのは英語教室。この5年間で生徒は約1000人に達した。「英語のしゃべれる高級コールガールを育てるだけではないか？」という私の質問にその目的を以下のように話してくれた。

「1. パッポンの客のほとんどが外国人だから、客との交渉は英語がしゃべれなければ不利。対等なコミュニケーションのためにも最低限の英会話ができたほうが良い。

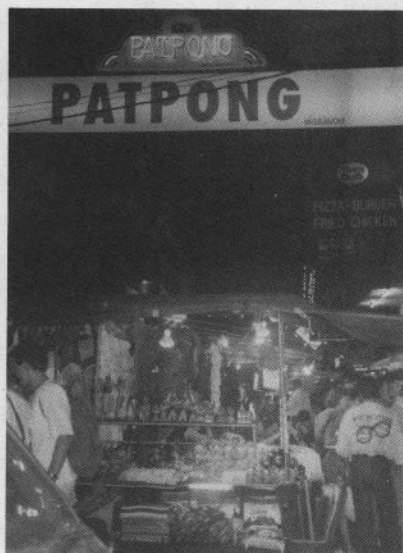
2. 英語が上達することが目的ではなく、パッポンで働く女性たちとempowerスタッフとのコミュニケーションのチャンス」

現在の先生はMCC^(注)から4カ月間派遣されているカナダ人の学生。生徒は現在5人から10人ぐらい。ビデオを見たり英語の歌で踊ったりしながら中学1、2年生ぐらいの英語を楽しみながら勉強していた。

またempowerでは売春や水商売以外に職業選択の幅を広げるために、裁縫や編物を習いたい希望者がいれば、専門の工場から先生をよんで教室を開いてもいる。これまでに美容師になった人、なんとNGOで働き始めた人もいるという。聞くところによるとお店に勤めるだけでは1カ月2500バーツぐらい(約15万円)だが、客とホテルにいけば一度で2000～3000バーツはもらえる。話をきかせてくれたパッポンのバーで勤めるその女性は、「毎日ホテルには行きたくない。empowerからの情報でエイズの危険性を知っているから」といい、それでも平均して1カ月に5000バーツは田舎(チェンライだといって)に送るし、妹をバンコクの自分のもとに引き取って学校に行かせているから、なかなかやめられないのだと教えてくれた。

empower独特の活動として、ほかには演劇グループがある。パッポンで働く女性たちから経験や考えを聞いて資料にし、ストーリーをつくっていく。たとえばRainbow of Showerというストーリーはパッポンで働く女性たちがどうしてバンコクに来ざるをえなかったか、農村での生活や家族の状況をおしばいにしてある。バーなどでは客の話し声でセリフがかき消されることもあるため、セリフは極力少なくし、動作や演技中心のステージだという。ほかにもエイズをテーマにしたものがあるが、最近は客をあまり刺激したくないというバー側の都合で、やってないので見る事ができなかった。観光地と繁華街だけでタイツアーを終える人には、タイを考えるきっかけになるかもしれない。

(注) Mennonite Central Committee
キリスト教系のNGO



バンコクの歓楽街パッポン(左)とempowerのスタッフ(右)

エイズセミナーを開く

現在、empowerの活動はエイズに対する教育的デモンストレーション（基礎知識と予防）が主になってきている。地域もバンコク・パッポンのほかに、チェンマイでも活動をはじめた。また、草の根レベルで地味に活動するだけでなく、厚生省の作ったアンチエイズに対する法案に、他18団体と協力してセミナーを開いたりしている。このセミナーは7月20日に行われた。

厚生省の作った法案はエイズ感染者の雇用と治療に関するもので、公私立病院でエイズ患者を治療できるようにし、感染者と交渉をもった人を不当に解雇してはならないとし、またエイズ感染者がいると思われる家庭を訪ね検査治療を施し、それ以上の交渉を絶たせ、普通の生活にもどすというもので、エイズ感染者の人権を侵すようなものではないと主張している。(1990・7・14 バンコクポスト)

これに対しNGOグループ側は、法案はどういう人に検査をうけさせるか、例えばエイズ感染者か、疑いのある人全員なのか明確でない。たとえエイズ感染者でないにしても、一度疑われたら隣家の人や職場の人間はその人が死にいたるセンセーショナルな病エイズだと思うだろう。またいくら感染をくい止めようというつもりでも、法案では売春婦やゲイをハイリスクグループとしてあげ、特にゲイに関してはゲイと交渉するとエイズになると書かれてあるなど、ゲイの人権を全く無視していると主張する。

セミナーに参加して感じたのは、各々のNGOが法案のこまかい言い回しまで熱心によく討議していた

ことだ。またセミナーと前後して、法案に反対するNGOが政府官邸の前でパフォーマンスで抗議したり、新聞にNGO側の意見を載せ、世論をおこそうとするなど非常にうまくマスコミを利用していたことだ。社会変革のため、女性ならではのきめの細かい活動と政府を相手にひけをとらないタフな対応は、私にとって学ぶことが多いものだった。常に何を実現させたいのか明確につかみながら、息の長い活動を続けていくことの大切さを改めて感じた今回の取材だった。

ところでempowerは「買春春」に対してどんな見解を持っているのだろうか。日本では女性団体が買春ツアーに出る男性を阻止すべく羽田空港などで反対デモをやったことがあった。しかしempowerのメンバーからは売春阻止という主張は感じられなかった。はじめは売春促進グループかと勘違いしたくらいだ。もとよりempowerも売春阻止の動きに対しては肯定しているのだが、それは同時に売春を職業にしなければならない女性たちを攻撃することになるから、表立ったアクションはとれないという。

最後に、私に話を聞かせて下さった多くの方々に感謝するとともに、パッポンで働く女性から日本で働く売春婦たちへの伝言。

「男性とホテルにいくときは、コンドームの使用をお願いします。もし何か問題があるのなら、empowerに手紙を書けばきっと相談にのってくれるでしょう」

オバサンは素晴らしい

北 詰 秋 乃

カンポーンさん

「ムアゴーンドー（お先に）」

80ccのスズキのバイクにまたがって、カンポーンさんが帰って行く。後部座席には彼女の息子が乗っている。お母さんの腰にしがみつ、顔を彼女の背中にぴったりとつけて、ちょこんと座っている。「まだ5時前なのに、あーあ」などと思いながら「ソークディー（グッドラック）」と私は手を振る。小柄できゃしゃな体に80ccのバイクは本当に大きく見える。なんとなく危なげにハンドルを操りながら彼女は帰って行く。

午後4時過ぎ、仕事も終わりの時間に近づくと、カンポーンさんの息子が階上の事務室に上がってくる。「あーあ、まったく仕事はかどらない」、などといらついていた彼女への思いがずっと消えていく。彼女の顔が突然、尊く、美しいものに見えてくる。それは、彼女が母であるからだ。母親である彼女を、私は限りなく尊敬している。「ちゃんとごあいさつしなさい」、「いたずらはやめなさい」。そんなことを言うカンポーンさんの顔はまたいつもと違っている。彼女の人の良さとおっとり加減が時には頼りなく見えるが、母であるカンポーンさんは本当に力強い。

カンポーンさんの朝は忙しい。2人の子どもに食事をさせ、洋服を着せて家を出る。1人を地域の保育所に預け、1人は職場であるMCトレーニング学校の保育所に預ける。時折ぐずる息子を振り切って彼女は仕事にはいる。朝8時から夕方5時までが、彼女のMCトレーニング学校での仕事時間である（もっともこの時間は、いまだしっかり守られたことなどないのだが）。彼女はベトナムへ留学中の御主人に代わって、一家のすべてを切り盛りしている。

がんばれオバサン

JVCのカウンターパートである女性同盟には生活を担ったオバサンたちがたくさんいる。かなりえらい役職についていても、ほとんど例外なくオバサンである。出張へ行くときに大きな麻袋を持っていき、米や魚をいっぱい買ってきたり、親戚が次の日遠くに出かけるからと、簡単に仕事を休む。

不思議なのは、どんなに大きな仕事をしていても、彼らに生活がつきまといっていることである。彼らが何をしていてもどこか洗練されていない感じが去らない。逆にどんなにえらくても、なぜか自分にとても近く感じる。それは同じ女性だからというだけではない。生身の人間にすごく近いから、とても親しみが持てるのである。そしてどのオバサンも、生きる強さを感じさせる。

がんばるオバサン

最近、カンポーンさんの住む公務員官舎の人々は、水くみがずいぶん楽になった。というのも、カンポーンさんがタイヘスタディーツアーへ行った時に学んだローワーポンプ(注)を取りつけたからである。大人も子どももみんな楽々水がくめるようになった。このポンプは、タイのNGOの人の協力を得て作り方を学び、持ち帰った。今まで学校の倉庫で眠っていたのを、初めて実践したのである。水が欲しい、もっと簡単に手に入れたい。出来たてのポンプのピストンを引っぱるカンポーンさんの顔は、これ以上はないというほど笑っている。

彼女は折あるごとに、県や郡の女性同盟の人などに、タイで見てきたポンプの話を聞かせている。機会があれば、喜んでトレーニングや普及活動に出向いていくだろう。少しずつ、少しずつ、彼女の目は外にも向けられている。

いくら私が夜半まで仕事をしたと忙しがっても、あの地、彼の地で大変だったといっても、カンポーンさんやほかのオバサンたちの前では少しも胸を張れないような気がする。私はまだまだ自分の生を自分で勝ちとっていないのかもしれない。

いくら私が物知りでも、いくら私が高度な技術を持っていたって、カンポーンさんが一言「タイで見てきたポンプはすばらしかった」というほどの説得力をもって、人々に訴えることはできない。カンポーンさんが自分自身の生活のために、自分の息子たちにすることが力を持つのであって、オバサンたちががんばれば、（ただし方向さえ間違えなければ）それこそものすごい力になるに違いないと、私は信じてやまない。

(注) 手で押して水をくみ上げるポンプ

“今”を生きる女たち

鈴木由子

カンボジア経済を支える

1990年2月、乾期のカンボジアを訪れた。朝8時にホーチミンを出て約3時間半、陸路でカンボジアに入る。話にきいていたとおり、乾いた荒野が果てしなく広がり、地平線には樹齡何十年、何百年といわれるさとうやしの木が点々と立っている。国境からさらに2時間半、車に揺られて首都プノンペンの中心に着いた。思ったほど暑くはなかったが、広い道路をわがもの顔に走り回る自転車やシクロ（人力タクシー）の運転手の流れる汗をみて、同じように汗がにじんでくる。

オフィスに着いてしばらく時間があつたので近くのオルセ・マーケットに足を運んだ。ある雑誌の記事に“東洋一大きいマーケット”と書いてあつたのでどんなものかと期待して行ったところ、建物の大きさもさることながら品数の豊富さに驚いた。タイやベトナム、シンガポールだけでなく、中国製の日用品も並んでいる。金銀、電化製品、食品から古着までありとあらゆるものが2畳ほどに区切られた店に並べられている。ほとんどの売り子さんは女性。ちらほら男性もみかけるが、圧倒的な数で女性がマーケットを陣取っている。これはカンボジアに限った光景ではない。日本の朝市でも手ぬぐいをかぶったおばさんたちが野菜や日用品を売っていたりするのはよく見かけるが、カンボジアではまさにその日の生活が彼女たちの手にかかっているから、迫力が違うのだ。「おんなの腕に支えられているカンボジア経済」ふっとそんなことばが思いうかんだ。そういえばカンボジアの女性の腕は、からだのわりに以外にたくましかった。

家族のきずなを求めて

1カ月と比較的長い視察期間だったので、プロジェクトだけでなく地方の農村やプノンペン市内の公共施設もいくつかまわることができた。この機会をフルに使おうと、行く先々で現地の人とコミュニケーションをはかるようところがけたが、時折はたと言葉の失う場面に出くわすことがあった。普段、ホテルの従業員や店先の女性と屈託のない会話を交わしているのとは違い、生身の人の過去と現在は同情



カンボジア人の母子
(文中とは関係ありません)

やなぐさめなど何も寄せ付けけない迫力がある。

タケオ県バティ郡で、郡の教育・福祉局長に連れられて貧農の多い村の一軒家を訪問したことがある。ボル・ポト以後移住してきた夫婦が自分の土地が持てず借地で米作りをしている家で、水牛も持っておらず食べるのもままならない状態で毎日を暮らしているという。よく話を聞いていくと、奥さんは20代そこそこ、3人の子供をたてつづけに産んだが3人めの子供は栄養が足りず、月令のわりに小さくて元気がない。旦那の方はすでに40歳を過ぎ、本妻が家にいるがほとんど彼女の家にいることが多いという。推測だが、ボル・ポト時代肉親を失い、だれも頼るあてもないところいまの伴侶に巡り合い、貧しいながらも寄り添える家族を作ることができたのだろう。彼女にとっての最大の労力は、どうやって食べていくかではなく一度壊れた家族のきずなをどうつなぎもどすかということに注がれているように思えた。同じ女性であるだけに彼女の立場がどんなに不安定で頼りないものか考えると、もう少し賢い方法を薦めたくなるのが人情だろう。しかし、彼女の子供を抱く勝ち誇ったようなゆとりのある姿態に向き合うと、何物にも揺るがない自信が伝わってくるから不思議だ。“この人がいたから復興11年の年月が支えられてきた”と思える有力者の女性には何人か会ったことがあるが、彼女も「女の国になったカンボジア」の歴史を担ってきた欠けがえのない女性のひとりなのだ。“今”を生きている彼女に、私が発することばなどなんの意味も、保証も持たない。“今”が彼女にとっての最大の関心事であり、戦いでもあるのだということを知らされたような気がする。

柴田 星野さんていつも元気だけど、元気のもとを教えてほしいなあ。

星野 1945年4月に、米軍のB29型機から猛爆をうけて東京にあったわが家が灰になりました。それが当時12歳だった私が初めて肌でふれた外国の存在だったんです。「海に囲まれた自分の国が、外国との関係において、何か馬鹿げたことをしでかしたらしい。国民は勝利を信じさせられ、死に直面してさえ真実を知らされなかったのはおかしい」と、子ども心に国家とそれを構成する人間に深い疑問をもっていたのね。戦後、日本が復興する以前から、自分は家庭の中で男女の隔てなく自由に育てられたので、結婚するまでずっと自由でした。

ところが今から35年前の結婚が、自分の人生を後

退させるといふか、これ以上後ろはないというところまで行ったのね。姑が死ぬか自分が死ぬかという瀬戸際まで追いつめられてしまった。

自分の中に自由への欲求がある、人間として社会に貢献したい思いがある。押えられるから不満もたまるんだ、私は家庭や社会への不満を打ち消さずに、自分の中に不満をふくらましていった。結果的にはこの不満を培養させ、爆発させることでジャンプできたんだと思う。

なぜ今の女性が元気がないかと言うと、がけっぶちに立っていないから。自分の自由への欲求と、保護される快適さを天秤にかけているから、ダメなんです。第三世界と違う先進国の生ぬるさにつかっている。



元気印の元祖 星野昌子さんに聞く

自分を追いこむから

パワーがでるのよ



離婚して協力隊に行こうと決めたときも、どんなに苦しくても150ドルあれば食えるという自信があったから、何もこわなかった。出戻って食べていくこともできたけれど、自分のやりたいことをやって、最低食えるという状況だったので、新しい展開が見えた。

私は結婚するまでは人間としての自分に自信があったのね。友だちもたくさんいたし、勉強も好きだったし、スポーツもやったし。ところが結婚したら、家族全員で歌舞伎に行くのに、私だけ留守番でみんなが帰ってくるまでにご飯をつくっておけ、お風呂の準備をしておけと言われてこれ何なんだ！自分に悪いところはないのにとすごく憤った。最初は、子どものために頑張ろうと割り切っていた。でも、亭主は浮気してくるし、いろいろあって、それでもそんな状況から抜け出して立ち上がるのに9年かかった。

家族も理解してくれなくて、別れたら子どもは引き取らせないと言われるし、まったくの四面楚歌でした。だから、離婚してからは大抵のことで泣か

なくなったわね。

おかしいことに対して、おかしいといえる力は小さい時に培われていたので、それが私に物を見る視点を与えてくれたと思う。

難民などは追いつめられているほど、それまで所属していた社会の規範をふりはらって切り返すチャンスがある。日本では教育も受けられるし、可能性もあるのに元気がなくなっていく。

柴田 男でもエリートへの階段を降りて生活に追いつめられると「男はこうあるべきだ」という道からはずれて、自由になれる。自分で真剣に考えているかどうかだと思う。

星野 別れた後は、一年くらい外国人に日本語を教えて生計を立てていた。図書館にもよく通って、そこで新聞を見ていたら協力隊の募集記事をみつけた。その時私は32歳だったんだけど、受けたら受かった。それから研修を受けたんだけど、学生時代に戻ったように元気になった。

海外の現場に行ってから、第三世界が置かれている状況と、自分の問題を重ねて見るようになった。

だけど、第三世界の抱えている問題は自分たちの努力ではどうにも解決できないものがある。そのことを強く感じた。

柴田 ところで、日本では女の人がどんどん変わるのに、男はなかなか変わらないねえ。

星野 それでもまわりがうるさいから、男たちも努力しているみたいだけど。ラオスで再婚した今の夫は、私から「権力に呑込まれない強さ」を学んだと。私、私の人間としての良さを認めてくれているのね。女のくせにとか女房だからという見方はしない。一緒にいて良かった。

自分で立ち上がるきっかけを作った人は、食べていくためによく体を動かす、苦しければ苦しいほど高揚感がある。まわりから見てても存在感がある。



日本語学校の生徒に祝福されて結婚。

人から保護され安定した生活の中では、人は高揚しない。体力的にも家庭の事情からJVCに貢献できなくなった今、JVCから保護されるのも良くないと思って専従をやめたのだけど、かえって給料を切ったら俄然元気になったわね。日銭を稼ぐと張りができる、瞬間、瞬間が勝負。衰えてきたからといって、体力的に保護されるのは良くないと思う。

ラオスにいた時、中流家庭に下宿し、一日二食を家族と共に暮らすを1年9カ月続けた。50代の両親と大勢の子どもから成る一家で、自分たちの手で建てた家に住み、米、野菜、鶏、卵などを自給し、暇があれば河魚、蛙を追うような彼らの暮らし。水道もなく、離れた所にある井戸から水を運ぶ日々の生活の重い労働が、決して女たちだけにおしつけられることなく、家族の一人一人の能力、体力に合わせて、誰が命令するともなく分配され、多少知恵遅れの少年も、それなりに役割を果たしつつ、家を担う姿に心を打たれたのね。特に50代半ばの母親、成長した二人の娘、そして近所のおばさんたちが単一機能を押しつけられることなく、社会生活と家庭人

としての役割を両立させ、トータルな人間性を発揮し、明るくはつらつと生きる様子は、私を心底驚かせた。物が溢れても心貧しく、男性に依存して遠慮し、社会通念に縛られ、自分の資質を十分に発揮して社会に貢献することもなく、ただ安楽に生を終わりたいと限っているように見える多くの日本の女性たちと、このラオスの女性たちがあまりにも対照的だった。

そういうのを見ていると今の社会では人工的に自分で状況を作らないととどろんだめになっていくのね。

でもタイでは女が働くのは当たり前だから、日本とは対照的に女がただ家にいるのを恥ずかしがる。

ラオスは婿入り婚だし、女が不動産をもってるし、圧倒的に強いね。伝統的に強い。家庭に閉じ込められない、自己を発揮する基盤がある。

この間職業安定法違反で逮捕されたタイ女性の通訳をしたけれど、その中の一人は日本人と結婚しているのね。でも夫は単身赴任で不在がち。彼女と一緒に地方へ行きたいのに。日本語もできず、孤独だったから他のタイ人に誘われてタイの売春婦を店に世話し、得た金は貧しい身内に送金し、次第に深みに落ちてしまった。企業人間の夫は「何不自由ない暮らしをさせていたはず」と不満をかくせない。農村からの出稼ぎを除いてタイでは単身赴任の習慣はないし、女性は結婚しても働き続けるのが普通だ。

「亭主は丈夫で留守が良い」と自分で状況を切り開かない日本女性。他の国では女性から逆に「それじゃどうして私と結婚したの」と問われるでしょう。

＊星野さんは自分が生ぬるい安易な状況におかれると（それは普通の人にとっては生活が豊かで楽になったことを指す）、あえてそれをなぐり捨てて、再びより困難な状況へと飛びこんでいく。彼女は、その困難な状況を自らの力で打開していくことこそ、それは人を豊かにし、幸せにする道と信じている。そして何よりもそれを実践してきたおばさんである。

しかし、それはどんな困難な状況に直面しても、前向きに真剣に戦っていけば誰でも打開できるという、すべての人間の可能性を限りなく信じている強さである。このへんに星野パワーの秘密がありそうだ。（柴田久史）

人種差別とフランス社会

Hideko Ishihara

よく道を歩いていると近所の子供たちに、「や〜い中国人」と言われる。昨日もまた言われた。子供たちにリンゴを投げつけられた事もあった。メトロの中でフランス女性に頭から棲先までジロジロ見られ、あげ句のはてに「あんた中国人のくせによくこんなきれいな洋服着れるわね」と言われた事もあった。2年半のフランス滞在でこんな事にもすっかり慣れてしまった。

私の住んでいるモンマルトルの丘のふもとの18区はパリの中でも移民の多い地区で、16区（日本では「田園調布」）に住んでいる多くの日本人はあまりこういう事を経験しないのではないかと思う。

パリの18・19・20区には主としてアラブ人（フランス人でひと口に言う「アラブ」とは、アルジェリア・モロッコ・チュニジアの事。「マグレブ」とも言う）とフランスの旧植地だったアフリカ諸国の移民たちが多く住む。異国にいるせいか、同国人がかたまって住む様になり、徐々にフランス人が他の地区へ移り住み、移民の区ができあがった。「や〜い中国人」と言ってバカにする私の地区の多くの子供たちはマグレブ系・アフリカ系移民の2世である。

どうして子供たちはバカにしたがるのだろうか。大人たちは子供たちを自分たちよりも低い地位の人間として扱う。低い地位とされてしまった子供たちは、自分よりもっと低い地位の者を捜して大人たちと同じことをする。おそらく、私のことを「や〜い中国人」と言ってバカにするマグレブ系・アフリカ系移民2世・3世もフランス人の子供たちによって「や〜いアラブ人」「や〜いアフリカ人」と言われているのではあるまいか。

フランスの場合、植民地の解放にともない、また高度成長期において単純労働者を中心に労働不足が深刻化し、アジア・アフリカ諸国出身者、特にイスラム系が多く移民する様になった。フランスでは現在約300万人のイスラム教徒がおり、ユダヤ教をぬいてカトリックに次ぐ第2の宗教となった。特にパリや大都市の周辺にあまりに移民が集中し、彼らの存在が顕著になり、また彼らが発言を開始する様に

なると、今度はフランス人にとっての「許容の限界」に達し、今マグレブ系・アフリカ系移民に対するラシズムが深刻化しつつある。

メトロの中で、あまりの混雑に（東京の比ではないが）たまりかねた中年の女性が「お前ら移民がどんどんフランスに来るからメトロがこんなに混む様になったんだ。移民たちは自分の国へ帰れ」と叫んだ。こんな光景がすでに珍しくなくなってしまった。

あるフランス人はマグレブ系・アフリカ系移民の事を「あいつら泥棒ばかりして、あいつらのしわざで治安が悪くて仕方がない」などとひと口に言う。だが、マグレブ系・アフリカ系だから犯罪を犯すのだろうか。否。マグレブ系・アフリカ系移民2世にとって不幸なことに、青年期がフランス経済の不況期にあたり、様々な教育上の問題（例えば宗教上からくるもの）等により卒業証書を取得するに至らず、フランス人の差別と偏見も加わり望ましい職業につく事ができないため「非行」等の問題が発生しているのだ。また移民2世にとって彼らが属するのが両親の国なのか、それとも、生まれ・育ち・教育を受けたフランス社会なのかという点で「アイデンティティの危機」が生じ、現実逃避のため麻薬を常習する様になったりする。

この様に様々な要因により生ずる「非行」の原因を見ずに結果だけで判断し、差別し偏見を持つのは危険なことだと思う。

今、フランスは、「自由・平等・博愛」の理念のもと、異文化を持つ者（特にイスラム文化）の権利をも認め、なおかつ彼らと「共存」そして「統合」してゆく道を模索中である。

話は前後するが、先日メトロの中でアジア系の女性から「あんた何人？」と尋ねられた。「日本人だ」と答えると「あんたアラブ人をどう思うかね」と聞かれ、唐突な質問につまっていると、「あいつら、泥棒や悪い事ばかりして、私たちフランス人はアラブ人が大嫌いなんだ。あんたそう思うでしょ」と言ってメトロを降りていった。私はこの発言にひどくショックを受けた。同じ移民同士、異国に住む者同士でどうしてけなし合いをするのかと、悲しい思いがした。

移民の中の優等生アジア系は、マグレブ系やアフリカ系によって移民の評判が悪くなるのを恐れるた

めか、彼らを嫌う。「フランスの純血」擁護を叫び、移民労働者の追放、移民による犯罪の増加やエイズ対策の強化、麻薬常習者に対する厳罰を声高に要求する極右政党の国民戦線（フロン・ナショナル）のル・ペン党首を多くのアジア系フランス人が支持しているのも事実の様である。

人間はどうして自分よりも下の身分を作り支配したがるのか？悲しいことに何処の世界にもラシズムは存在する。

差別を作るのが人間の習性だとしたら、1番下等とされてしまった人々はどの様に生きていったらよいのだろうか。

日本人の欧米人に対する劣等感と、その他の有色人種に対する優越感を私は嫌悪する。劣等感を持つという事は欧米人を自分より上等の人間と認める事で、それゆえ自分よりも下等な人間を作ろうとする。何と愚かなことか。

我々はたまたま日本人に生まれたことを、そして我々の国が地理的・気象的その他の要因がうまく重なり合い（日本人の努力も当然あるが）世界の先進国となったことを、またたとえ国が貧しくても日本文化に勝るとも劣らない文化が第三世界諸国にもあることを忘れてはいまいか。

自分と違った文化・宗教・肌の色等を持った者を排除または差別するのではなく、理解しようと努力し、彼らと「共存」する道を歩むことが我々に課せられた今後の課題ではないかと思う。

最後にあるカフェでの話。二人の元兵士がラシズムについて話し合っていた。一人はラシストで「移民はすべて自分の国へ帰れ」と声高に訴えていた。するともう一人が「何を言っているんだ、お前。第2次大戦の時、マグレブ系・アフリカ系フランス人達が、フランス人兵士の前に列を作り（chair á canon（大砲の餌食）という）、フランス国家のためにフランス人より先に死んでいったのを、お前は忘れたのか。それを今さら、いらなくなったらどうぞお帰り下さいとは、あまりではないか」と静かな口調でいいかえした。



地球をもういためつけないで

高校1年 太田かおり

私は緑や花で一杯の地球が大好きです。でも近ごろ、地球環境汚染や自然破壊が問題とされる中“ここまで痛めつけられていたのだろうか”と、とても心が痛みます。ある新聞では、酸性雨によって少女の銅像にその雨の流れた跡がそのまま残って、「銅像も泣いている」と、その記事の横に印刷されました。また、『地球人として生きる』という本を読んで私たちは日本人であると同時に“地球人”であるということを自覚しなければならないと思うようになりました。

“先進国”と呼ばれている日本ですが、私はそこに住む一人として、日本は決して豊かな国ではないと思うのです。物質的にも精神的にも……。

今の日本は、生活するために数多くの資源をさまざまな国からの輸入に頼っています。このような状況にある日本へもしこれらの資源が輸入されなくなった時、私たちは生きていけるのでしょうか。現代、そして21世紀を生きる私たち若者の中には、そのことさえも考えたことのない人が多くいるのではないのでしょうか。

あらゆる進歩が進められてきた現代。21世紀ではじっくりと現実を見つめ直す時代なのではないのでしょうか。

太陽があって、水があって、空気があって、人がいる。こんなにすばらしい条件の整った惑星が、地球以外にこの広い宇宙の中で、本当に存在するのでしょうか。私たちは、自分のために、世界の貴重な宝物である地球までも自分たちの手で痛めつけているのです。「もう、これ以上の進歩は必要ないのではないか！」そう言って、これ以上の地球汚染に歯止めをきかせることができるのも、地球人である、私たちなのですから。

この手紙を読んでいた方の中に、何かが心に残っていただけたならば、私がこの手紙を書いたことは、無駄ではなかったということになります。

もしよろしければ、どうかお便りをいただいて、現代の地球汚染、自然破壊、また、日本の国のあり方、そして私たちのこれからの生き方について、国際協力の中で働く方としての貴重な意見や考えを、どんなわずかなことでも、ぜひきかせていただければ幸いです。



カンボジア芸術大学の 2教授が来日

プノンペンの芸術大学音楽学部長のクーン・トーン氏（西洋音楽）、同副学部長フン・サリン氏（伝統音楽）が、大阪で7月末に開催された国際音楽学会シンポジウムと兵庫県主催のアジア太平洋芸術フォーラムに出席するため7月19日から12日間日本に滞在し、カンボジアの音楽状況を報告、楽器等の支援を訴えるとともに、各国からの音楽家や日本の音楽大学関係者らと交流した。JVCはこの訪問にあたり旅費と渡航手続き等を支援、22日には大阪で、両氏を囲む交流会を開催した。

ポル・ポト時代には学校は閉鎖され、両氏は百姓をして生きのびたが、多数の音楽家・教師が命



クーン・トーンさん(左)とフン・サリンさん(右)

を落とした。西洋音楽を学ぶ学生110人に対し、ピアノが3台、バイオリン10台しかなく、楽符の入手もままならない。また、伝統楽器を作る職人も数人しか生き残っていないという現状の中で芸術文化の復興・継承にかける熱い思いを両氏はとつとつと語っていた。（本橋 栄）

湘南で タクロー大会

台風11号が去って、快晴無風のタクロー日和となった8月12日(日)、ラオス人との交流イベント「ビーチ・タクロー(カトー)フェスティバルin湘南」(カトーはラオス語)が開かれた。相模湾岸周辺で行われている海の祭典「SURF'90」の平塚会場を舞台に、横浜ボランティア協会と日本タクロー協会の協力を得て、JVC神奈川が実施した。参加者は県内のラオス人、横浜ボランティア協会関係者、その他一般参加を合せて80人ほどであった。午後からは飛び入りの大学生も交えて、10チーム以上の大トーナメントとなり、熱戦の末、予想通りラオス人のトゥーイさんチームが優勝。タクロー初体験の参加者も次第にボールの感覚をモノにしながら、この伝統スポーツを楽しんでいた。

タクローは東南アジアで最も盛んなス

ポーツで、3対3で「足」を使ってプレイするバレーボールといった感じだ。オーバーヘッドシュートは本当にカッコイイ。日本では亜細亜大学と国際武道大学にクラブが誕生し、9月に北京で開催される「第11回アジア大会」の新種目にもなった。これを機にタクローを日本に根付かすことができるか、ラオス人の若者に期待がかかるところだ。最近コンサート事業などで成功しているJVCだが、スポーツ事業もいいかも知れない。「草タクロー」があちこちで見られる日を夢みながら。



カレンダー販売に燃える

高梨直樹さん

今、JVCカレンダー販売のため走りまわっている高梨さん。

「う〜ん、無口そうな人だなあ…」というのが私の印象でした。(本人も照れ屋なんです、と言っていました)

「僕の学生の頃は、受験戦争だの何だのって、物質的には豊かなんだけど、精神的にはいつも何かにしめつけられてるっていうか…。しんどかった」

もともとアフリカが好きだったうえに、こうした精神的なしんどさから、「日本の繁栄って何だ？」と疑問を持ち始め、その繁栄の裏側の第三世界に、自然に気持ちが動いていったそうです。

88年2月のピースボートのツアーで、タイ、ベトナム、カンボジアをまわり、その時に、たった一日でしたが、プノンペンでのJVCのプロジェクトを見学し、初めてJVCを知りました。それから一年後、89年の2月に「宛名書きでもいいから」という気持ちでJVC



のオフィスを訪れ、以来グリーンウォーク、レゲエコンサートの手伝いなど、ボランティアとして活動してきました。そして今年、突然の「新聞でみるJVC」の編集。いきなり抜擢され、「いや〜、あれは大変だった」としみじみ。3年間分のJVCの記事を編集したそうです。「これを読めば3年間のJVCの活動がわかります！」

現在はスタッフとして、来年のJVCカレンダー販売の仕事を全面的にやっています。

「今回のテーマは、アジアの風景です。人といっしょに風景はつくられている、という管さんの言葉通り、ほとんどの風景に人がいます。見ていて落ちつくというか、日本人が忘れてしまった何かを思

いおこさせてくれるというか…僕は表紙の写真が一番好きなんですけど… 何度見てもあきない。すばらしい写真です」とのこと。目をキラキラ輝かせておりました。(本人がキラキラって書いていてねって言ったんですよ)

今後は？ という質問には、「やっぱり現場に入って仕事をしたい」という返事。

「自分がこうして活動していることが、これからどうつながっていくのか、まだまだわからないことが多い。でも逆に言えば、だからここに来てる」とまだまだ修行中の身だそうです。

「いやー、みなさん修羅場をくぐりぬけてきた人達だから…」

無口で照れ屋と思っていたけど、逆に私のことを質問され、どちらのインタビューかわからなくなったりと、第一印象が少し変わりました。

高梨さん、頑張ってください！

(川上園子)

サラワクの森を守ろう

SOSサラワク・キャンペーン委員会が発足

7月28日、「SOSサラワク・キャンペーン委員会」の発足式が行われた。このまま伐採が続けば、10年以内にも森林の消滅が予測されるマレーシア、サラワクをなんとか守ろうと、70人が集まった。

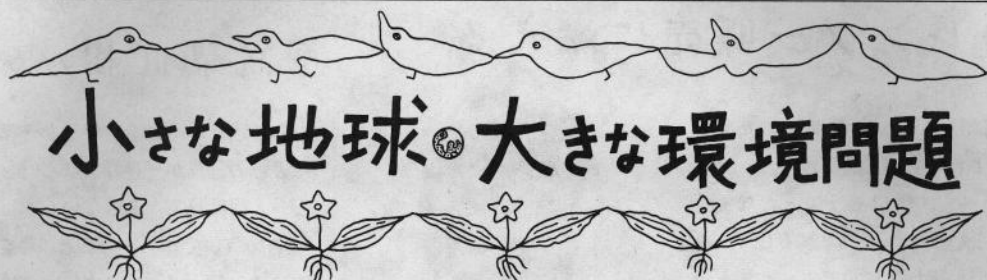
呼びかけ人のうち、竜谷大学の中村尚司氏は、「いま、日本は外から物を運び込むばかりで、運び出すものはほんの少し、こんなことでは日本がゴミだらけになり、日本の将来は危うい。『SOSジャパン・キャンペーン』も併せて行う必要がある。そ



のためにも熱帯材の輸入は禁止すべきだ」と発言。

サラワク・キャンペーンは、全国の自治体に公共施設建設に関して熱帯材を使わないことを申し入れるなど、誰もが身近なところから運動を起こせるよう、マニュアル作りから始めている。

連絡先は 03-476-3251



タイの森林事情

タイの森林面積は、1961年に国土の53パーセントあったものが、今では18パーセントに減少している。森林消失のおもな原因は、森林伐採と伐採跡地の商品作物栽培のための開墾である。森林のほとんどが平地であったり、あるいはなだらかな山地であったことから、ひとたび開墾されると開墾地には村が形成されてしまい、森林に戻すことはたいへん難しい。森林消失は、雨量の減少、衣食住にかかわる森林資源の消失をもたらし、農民の生活を難しくしている。

これに対して、タイ政府は、植林計画「東北タイを緑に (Green Isan)」キャンペーンを打ち出し、森林面積を40パーセントに回復することを目標にしている。しかし、この植林計画の実態は、生態系の回復のための緑化ではなく、日本の製紙業界の要請に沿った、パルプ原料としてのユーカリを主とした商業植林であるため、環境保護団体などから激しく攻撃されている。また、企業単位の広域植林の方が効率がいいことから、企業による国有地の借り入れや農地の買収が進んでおり、その土地に長年住んできた農民たちは、土地を追われることに対して、激しい抵抗を試みている。

生態系を破壊しない農業

耕地拡大→森林の消失→土地の疲弊→耕地拡大の悪循環を断ち切る農業は可能か。JVCでは東北部で生態系を破壊しない農業、水田と水田に掘った池を中心にした複合経営農業 (Integrated Farming) を試みてきた。近代農業の基本である単一作物の広域栽培 (モノカルチャー) に代わる方法として、土着の種をできるだけ多種混植し、地域での生物循環をはかり、生態系を豊かにする。それと同時に、農民が多種の生産物を持つことによって、仲買人の言いなりに売らなくてもいい、生産者主導型の農業を目指した。

生態系を破壊しない林業

森林を材木資源とみなす林業では、植えつけから収穫まで、早成樹のユーカリでさえ5年以上、チークなどでは50年から100年もかかってしまう。したがって、森林は広域で少人数しか養えず、小規模農家が自ら植林に従事するということは、まず不可能であった。労働力が必要なのは、おおざっぱに言えば、植林時と収穫時だけである。

森林面積が増えれば増えるほど農地が減り、農民の行き場がないことから、背の低い若木の数年間だけ、木の間に穀物などを栽培することによって農民に耕作地を提供するアグロフォレストリーも試みられている。しかし、何年たっても土地が自分のものとはならないため、農民はこの方法を歓迎していない。

JVCは、今年から農民が食べられる林業を試みようとしている。森林を材木資源とのみ見なすのではなく、生きるための源泉と見なす。各農家が育てる森林の中で、材木となる木はほんの一部である。

対象となるワンヤイ村は、森林伐採地への入植村で、傾斜地で約15年間トウモロコシを栽培してきたが、土壌の流出は激しく、トウモロコシの値段は下がる一方で、誰もが借金を抱え、どうしたらいいのか途方に暮れている。

その村で、マンゴー、龍眼などの果物、タマリンド、コブミカンなどの香辛料、花や新芽の食べられる木、葉になる木、竹、ヤサイカラスウリなどの野草、綿をとるカボック、工芸用の籐、建築材、薪炭材などを混植し、一部には穀物や野菜も栽培する林業を始める。

環境破壊、農民の行き詰まりはこの村だけではない。ペチャブーン山脈に沿って点在する村全部が同じ問題を抱えている。ワンヤイ村での試みが広がり、豊かな緑が回復できるよう、農民に運動を広げたい。

(岩崎美佐子)

JVCプロジェクト

1990年7月25日現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会－毎月第1月曜日 午後6時～8時 毎月第2、4土曜日 午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介（代表） 林 達雄（事務局長） 熊岡路矢、星野昌子、前川昌代、鴛田三芳、山口誠史、岩崎美佐子、富安光子、今泉 恵、鈴木由子、富安康太郎、柴田久寿子、高梨直樹
神奈川県 (JVC 神奈川)	神奈川県内での渉外、事業計画、資金調達等を行う。 8月26日に行われる第2回エチオピア支援バザーの準備と10月に予定されているポートウォークよこはま、チャリティーコンサート、管洋志写真展などの企画調整をしている。		清水俊弘
日本国内	●定住難民プロジェクト 7月8日、数人のJVCボランティアを中心に「インドシナ料理の会」を開催した。横浜市金沢区の富岡集会所を会場に、ラオス人の講師から日本人参加者がラオス料理やその文化について学んだ。今回の参加は40人。次回はベトナム料理の会を行う予定。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金、ケアハウスさくら苑	小野豪大、他約60人
エチオピア (東ゴジャム州) ビチュナ	●ビチュナ緊急救援活動 東ゴジャム州、青ナイル峡谷沿いの低地斜面に住む2万5,000人の干ばつ被災者に対して①フード・フォー・ワークによる食糧配給、泉の保護、環境保全、支道建設、②保健衛生教育と診療所への支援を行っている。 －配給に必要な食糧3,000トンのうち、957トンカナダ政府から調達し、第1回目の配給を終えた。 －同時に、テーブル台地の縁から低地までの道作り（歩くための道）を、現在行っている。 －エチオピア救援のための支援金が1千万円を越えた。 －その後の調査により、同地域は85年以来雨不足が続く、JVCスタッフがマーシャのコレブ地区で見てきたどの状況よりも深刻化していることがわかった。 ●総合的復興促進（マーシャ村） 内戦のため昨年11月より中断している。再開が待たれる。	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動、モラロジーMIRC、東京グリーン・ウォーク、西本願寺、チャリティ・サイクル、Tree for lifeの会、中部善意銀行、毎日新聞社会文化事業団JVCカレンダーメサイアコンサート エチオピア救援バザー	山田 盛、江原浩昭、江原広美、田尻真由美、寿賀一仁、中野周二、イエットベルク、ソロモン、バレット、ダニエル、エシヤットー、トーマス、シュクール、アリ、アビエ

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲトー郡) ハルバ・キャンプ (ゲトー郡)	●農業による自立促進 各農場の作物の生育状況は、雨が例年並以上の雨量を記録しているため、順調に育っている。このまま害虫の被害がなければ、豊作が期待できる。 現行の農業プロジェクトを行う一方で、来年度に開始することを検討している遊牧民を対象とした新プロジェクトのために、磯田が調査を開始した。今年度末に終了する農業プロジェクトの後、JVCがソマリアに留まるか完全に撤退するかを決める重要なフィールド調査である。7月から8月にかけて、3～4回の調査旅行を予定している。	UNHCR, 仏国土をつくろう会 メサイアコンサート	磯田厚子, シアッド, ムハボ, アオキ, ヒレ, ラシッド
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	●農業による自立促進 UNHCRの食糧配給が少なくなってきたおり、JVCに対して農業による自立のための援助を求めてくる難民グループが増えてきている。この2カ月間で15グループが応募してきた。国連の撤退が現実のものとなりつつあり、食糧配給が断たれた後の生活を真剣に考えだしたようだ。今年度末のJVC撤退前に、どれだけの人々の要求に応じられるか、現在調査中。	UNHCR, R.I. Japan	船川秀夫, シュクリ・モハメッド
カンボジア カンボット県 プノンペン カンダール県	●サンタビエップ技術学校/ワークショップ 国土を復興するため物資の国内輸送を担う公共輸送機関の役割を重視し、部品・設備の供給、自動車整備士の養成を初期の目標として、1986年にこの事業を開始した。運輸省輸送公社が現地の実施機関となり、JVCは自動車整備の教官を派遣した。 当初より訓練を受けてきたのは、ワークショップに配属された輸送公社の職員が中心だが、ほかに孤児などにJVCが奨学金を出し、研修生として受け入れている。現在生徒・スタッフの合計は42名。 訓練では、実習を兼ねたトラックの修理と並行して自動車工学などの知識をくり返し教えている。第三期は今年9月に始まるので、それに向けてカリキュラムの整備、カンボジア語の教材・教科書の準備を急いでいる。また、今までの教室は騒音が激しいため、4月より新たに教室棟の建設を開始し、この8月、ほぼ完了する。 ●RINE (ライン) プログラム (母子保健活動) プノンペン郡では①母子保健センターと巡回母子保健活動 ②発育グラフの記入の仕方の講習会 ③郡病院でのお粥・豆乳サービス ④子供の栄養状態の悪い村を選んでの各家庭の生活改善 ⑤再度の小児発達態調査などを援助する。また、助産婦技術向上訓練の成果を見届ける。 プノンペン郡の16の村で巡回母子保健活動を実施し、とりわけ栄養状態の悪いと思われる村を選んで小児発達調査などを援助する。また、助産婦技術向上訓練の成果を見届ける。 ●井戸掘り・給水 1990年からこの活動はOXFAM・LWS・JVCと農業者水利局との共同事業となった。7県とプノンペン市に、今年90本の井戸が掘られる予定で、JVCはこのうち、15本の井戸掘りを援助する。バタンバン県の国内避難民のために20本の井戸を掘ることになった。 ●内戦による国内避難民への緊急援助 戦闘の激化によって、バタンバン県、バンテイ・ミエンチェイ県に7万人近い避難民が流出し、政府、カンボジア赤十字とNGOが協力して救援活動をすすめている。	創価学会青年平和会議、モラロジーMIRC、立正佼成会、日産労連、西本願寺、善興寺ダーナ基金、高岡寺族青年会、毎日新聞大阪社会事業団、明るい社会づくり運動神奈川県協議会、浄土宗東京教区青年会、国際保健協力市民の会 (SHARE)、四日市商業高校、JVCカレンダー、全日本仏教青年会、カリタス・ジャパン、「第1回カンボジア・クラシックコンサート」、真如苑、「武蔵野市100周年キャンペーン募金」、生協ひろしま、銀座ライオンズクラブ、メサイアコンサート	古西 勇, 馬 清, 杉江美子, 本橋 栄 「現地の実施・調整機関と主な担当者」 (運輸省) 国際局 メアス・サメット 自動車輸送公社 タック・カン ワークショップ アム・ディエン ノブ・ティム ゲット・ソーン カム・ボラ (保健省 母子保健局) アン・サルン医師 カンダール県 保健委員会 ニム・ニェム医師 プノンペン郡 保健事務所 サム・サルン医師 母子保健活動 トゥイ・カッ マッ・サモン (農業省 水利局) テ・アヴ・キム 井戸掘り活動 ホック・セタ ソー・サリン

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、ラオス・カンボジア・ベトナムを含む、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整 ・カンボジア国境のタイ被災村の井戸修理が完了。 ・7月21日、日本人主婦ボランティアの協力を得て古着のバザーを行った。売り上げは約4,700バーツ。これはブリラムの村の主婦が農協を開くための活動資金に用いる。	全国社会福祉協議会 電力総連	ボンピモン・チャイブーン、 カモン・ミンムアン、 大石道子、主婦ボランティア15名
カオイダン （カンボジア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 ドライビングコースに関して第1期生16名を決定した。帰還後、修理、メインテナンスのできるドライパーを養成する。また、かじ屋コース開設のための準備が始まった。現在、生徒数は609名である。	UNHCR, SV (Stichting Vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム、 スティ・ネップラコン、 井本勝幸、井本美奈
バナニコム （第三国定住待ち キャンプ）	●日本語学校 6月29日、ビデオの上映、日本料理、そして「もっと日本を知ろう!」をテーマにオリエンテーションを行った。ベトナムの生徒の日本出発時期が決定。 （第1グループ 50件54名は7月下旬） （第2グループ 7件7名は8月下旬）	IOM	竹村雅義、熊沢ゆり、 岡村達司、蘭牟田浩美、 チャワリット・ドゥワンボム
地域開発 (CD) （バンコク市内の スラム地区） （ブリラム県の M村）	●奨学金プロジェクト 奨学金は農村部に移行することを検討している。 ●クントイ図書館 成人対象の識字教育を始める。 ●農村開発 村人は田植えに忙しい。 深井戸を3つ掘った。 チャプーンでの環境プロジェクトを構想中。	モラロジーMIRC, Tree for life の会、雄勝町町 内寺院会、国際 ソロプチミスト 駿河、JOFIC、 からし種、JVC カレンダー、メ サイアコンサート	コメン・スンスマン、 スندگان・ロースワン、 サムルアイ・ジョンヨー クラン、池島千津子、 トンカム・サムルーンラム
ラオス ヴィエンチャン 県 ボリー・カム サイ県 カンムアン県	●生活改善普及員養成プロジェクト 第2回養成コースが4月24日から4カ月間の予定で始まった。このコースは農業改善のための基礎知識を保健衛生等の改善と関連させて教える。2月にはこのコースの準備として、トレーニング講師の東北タイ・スタディー・ツアーを行ったが、本コース期間中には、スタディー・ツアーを受け入れてくれたタイのNGOのATAから農村開発員を招き、講師として参加してもらった。 第1回養成コースの卒業生は、生活改善普及員として出身地域で母子保健を中心とした普及活動を展開している。また地方の普及活動の拠点として計画した三つの母子センターの建設が終了し、各センターでの普及員によるトレーニングも順調に進んでいる。	UNDP, UNIFEM, 庭野平和財団、 NVC、日産労 連、ギャラリー イカット、聖ヨ セフ老人ホーム、 老人ホーム天寿 荘、難民と地球 の緑を考える会、 グループ・カン ガルー、メサイ アコンサート、 JOCV、JVCカ レンダー	谷山博史、北詰秋乃、 原田恵津子
ベトナム	（南部）1月と4月の調査に基づきホーチミン第8区とビンチャン郡の障害児教育、病院/保健所の分野でのプログラム改善案を6月のJVC総会に提案し、承認された。 （北部）香港からベトナム北部への難民自主帰還は7月1日現在3000人を超え、毎月750人が自発的に帰国している。その半数以上がハイフォン市出身の人間であるが、これら帰還難民と一部地元の人々を対象に職業訓練（洋裁、木工、電気、自動車）を計画している。これはUNHCRのプログラムであり、ハイフォン市労働局とJVCが実施する。	庭野平和財団 （調査費）	熊岡路矢

(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい)

定価 送料共300円